

「牛馬の神様

ぎゅうば

大將軍神社」

だいじょうごんじんじや

篠原小倉山にある、大將軍神社だいじょうごんはの、
今から約八百年くれえ前、

平安時代の終わりのころ、加賀ん国かというち、
石川県の篠原岳にござった御仏体の三体で、
日本でん、指折りの牛馬の守護神仏としち有名な御社じやった。
そん仏様が篠原の山に移つちきたということじや。

何で挾間町に來たかちゆうとのー、

源氏と平家の争いの時、平清盛が、源氏に追われた時んことじや、

加賀の国 篠

原岳ん御社に

加藤兵部大夫

かとうひょうぶだゆう

ちゆ人がおっ

た。

兵部太夫は、

兵火へいかからのが

れるため、

御仏体を守っ

ち、安置でき

るところを求

め、

日本中をあつ

ちこつち流れ

歩いたんじや。

やがて、寿永四年（一一八五）のこと、

やつとんことで、時松ん「トリスガリ」ちゆう所にたどりついた。

時松には、今でんめずらしい地名が残つちよる。

「買かい米」、米を洗つった「洗ついの里」、（現在名 荒井）とか、

姫が綾あやを織あちよつた音ん聞きこえる、綾織谷あやおりだにという名が残つちよる。



時松ときまつに、移住しておった文治年間（一一八五―八九）のころ、

ある夜、兵部大夫ひょうぶだいふ枕許まくらもとに神童が現れち、

「ここから一里ほど行った南の方に 清潔な高い山がある。そこに御仏体を安置しなさい。」

というお告げがあつたそうなの。

それで兵部大夫ひょうぶだいふは、御仏体を今ん所に安置し、

石川県の、篠原岳しのはらだけの名を取つち名付けたんが、

大将軍神社だいじょうしんの始まりということじゃ

世の中もおさまつた江戸時代 宝永六年（一七〇九）のころ、

肥後ひご（熊本）ん国の 細川越中守綱俊ほそかわえちゅうのかみつなとしちゆう殿様が、

参勤交代さんきんこうたいで、江戸（東京）にのぼる途中、

急に馬の元気がうなつた。

仕方なく野津原のつはらの、一の瀬ちゆうところに泊まつち、家来と相談したそうなの、

家来ん一人が、

「挾間の大將軍神社は、牛馬の守護神仏じゃから、

祈禱きたうしてもらうたらいかげしょう」と、殿様に申し上げたそうなの。

早速さつそく、次ん朝早よう、殿様は家来をつれてお参りした。

一の瀬に帰ちちみると、

なんと、元気な馬のいななきが聞こゆるじゃねえか。

殿様や、家来は靈験れいげんのあらたかにたまがちつしもうた。

とてん喜んで さつそく江戸に向こうち出発したという。

それから、三年間の江戸詰つめが終わつち

、肥後に帰つた殿様は、

旧正月の十三日に、金子一〇〇〇疋(疋は二十六文)米五俵と、

御輿みこし一台を持ちちお礼参りにきたんじや。、

それから、肥後藩の牛馬の祈禱所きとうしょとして定め

毎年お参りさせたそうな。

殿様はまた 村ん衆にも、

鏡餅かがもちや、赤飯を炊いち振る舞ったということじや。

鏡餅を供えたりご馳走する風習は、今でん村に残ちよる。

正月の十三日から三日間は、

九州はもちろん遠く四国、中国方面からお参りする人も多く、牛馬をつれち、お参りする姿は有名じやった。

近代農業の発達じ、牛馬を飼う人も少のうなつちお参りする人もめつきり減つちしもうた。

昔にくらぶると、淋しゆうなつちしもうたもんじやが、今も、正月三日間は、店まで出ち にぎやかじや。

資料提供……(町教育資料)

再 話……挾間町歴史民俗資料館館長・二宮 修 二

挾間町立図書館館長 ・ 山月 美江子

絵 ……一尾 和史